

フライドチキンが平気で売られる。店員のこういった態度に拍車をかけるのが、王になりきった客の傲慢な態度である。おれは客だ、丁重に扱え、という意識が程度の差こそあれ、大抵の日本人にはある。あるビデオショップでは、固室でポルノビデオを観た後、テレビ画面に精液をぶちまけたまま帰る客が頻繁にある。画面にねっとり付いた精液を店員が後始末するのである。客の振る舞いが尊大であればあるほど、客に対して店員が抱く嫌悪感が高められ、その結果、店員は先に挙げたファミリーレストランの店長のような行為に奔る。店員は客の目の前では深々と頭を垂れ、背後からは鼻糞を投げ付けるような真似をし、客は張りぼての王座に気持ち良く身を沈め、横柄な態度を取る。これが日本における店員と客の関係の実質だろう。こういった関係の中から、あのウェイトレスが老婆に示したような偽りのない心優しい態度が生まれるだろうか。店員と客が同等の

位置に立ち、面と向かい合い、偽りの王も、偽りの召使いも演じることのない西ドイツの社会において、確かに日本人は不愉快な目に遭うことがある。だが、店員と客の関係の基盤が対等関係であるがために、客の尊大な態度の行き過ぎも、店員の媚びへつらう態度の形骸化も抑制され得るのである。すなわち、両者が互いに相手を自分と同じ人間として、必要以上に敬わず、必要以上に見下さないがゆえに、ごく当たり前の人間関係を結ぶことができるのである。そして正常な人間関係が保たれているがゆえに、時として、あのウェイトレスがみずほらしい老婆に対して示したような心優しい態度が生まれ得るのである。ウェイトレスと老婆の一件を見た時から、僕が日本人としてドイツ人の店員に対して抱いていた不満は消えていった。そして、あのウェイトレスと老婆との間に咲いた美しい花が、いつか自分とどこかの店員との間にも咲くことを期待するようになった。

## 台所の貼紙

文学研究科学生 前野弘志

留学生活を楽しくするのに欠かせないもの、それは何と言ってもゆかいな友達だ。留学期間を終えてチュービンを立つ前の晩、寮の同じ階に住んでいた連中が、俺のために集まってくれた。場所はもちろん俺達の台所。広さは10畳ほど。バルコニーからはチュービンが一望できる。始めはおとなしかったが、興が乗ってくると、歌が飛び出す。踊りが飛び出す。あげくには、大道芸までやる奴が出る。3本のこん棒に火をつけて、お手玉するのだ。さすがに本人の顔もひきつっていた。みんなは俺に何か日本の歌を歌えと言う。それで、うーん、と考えた末、「ワインレッドの心」を歌うこ

とにした。もう一年も歌ってなかったので、歌詞を忘れてたり、1番と2番がゴチャゴチャになったりしたが、こいつらには分かりっこない。次の日、ちゃんと飛行機に乗れるかどうか心配だった。こんな楽しいさよならパーティーをプレゼントしてくれた寮の友人達も、実を言えば、帰国する最後の1か月ほど前までは、廊下で会って「ハロ」と声を掛ける程度で、そんなに親しい仲ではなかった。そんな連中とこんなに親しくなれたのは、ある一連の事件のおかげだった。最初は卵だった。冷蔵庫に入れておいた茶色い卵が、いつのまにか全部白卵になってい

た。しばらく悩んだが、気持ち悪いので、食わずに捨てた。それからしばらくたったある晩12時頃、喉が乾いたので、ビールを取りに台所へ行った時の事だった。見ると、いつも開けばなしになっている台所のドアが閉まっている。中から食器のふれ合う音がしている。誰かこんな夜中に飯食ってる奴がいる。妙だなと思ってドアを開けて見ると、全々見たことない男が二人、まったくピントの合っていないテレビを見ながら、スパゲッティを食べている。一人が「ハロー」と言うので、俺も、「ハロー」と答えたが、しかし、こいつらどうから湧いて出たんだ？ あんまりあっけにとられたので、咎める気にもならなかった。ちなみに、うちの台所には、もともとテレビなんかなかった。何日が立ってある日、冷蔵庫から俺のビールが消えた。これは俺の交換授業のパートナーが、

「このあたりで一番うまいビールだ」と言ってくれたものだった。

「例の二人組か」と思ったが、証拠がないし、第一あいつらがどこから来るのかも分からないので、しょうがない。とりあえず、冷蔵庫のドアに貼紙をすることにした。

「誰だ、俺のビールを盗んだ奴は！ 泥棒は入るな」。迫力のない文章だった。俺のドイツ語力では、これくらいしか書けなかったのだ。しかし、間もなくお手本になる貼紙が、ぞくぞくと我らが台所に貼り出されることになった。

食料消滅事件は、それからあいついで起った。一番被害に遇ったのは、例の大道芸のステファンだった。それも道理で、一番まめに料理を作るのが彼で、彼の食料が一番まともだったのだろう。彼の最初の貼紙は、こんなぐあいだった。「反逆者！ どこのどいつだ、俺の食料を取りやがったのは？ 返せ！」。それでも効きめがなかったらしく、何日かして、別の貼紙がしてあった。

「警告！ 再度重なる食料消滅に、私は深く感謝する者でございます。お礼といたしまして、今日より、ここにあるすべての食品に、ある種の毒物を混入いたしました。この毒物を食しますと、初めは脱毛、脱菌、次には呼吸器官の障害、さらには死に至ることは、確実でございます。もしここにある食物を食べて、このような症状を訴えられましても、一切の責任を負いかねますので、御了承下さいませ。それでは、召し上がれ！」。これは迫力のある文章だった。しかしその効果も1か月と持たなかった。そしてついに、決定的な事件が起こった。ある晩帰宅すると、台所のドア一面にデカデカとこんな貼紙がしてあった。「警告！ またまた誰かが俺のビール2本とチーズ500gをガメやがった。見つけたら警察に突き出してやるから、そう思え。もしこの辺をうろろしているよそ者がいたら誰でも、ひっぱたいてやる。も一堪忍袋の緒が切れた」。最後通牒だった。

ドアの前でこの貼紙を読んでみると、ステファンがやって来て、

「弘志、お前今晚不審な奴を見かけなかったか」。

「いやー、見かけなかった」。

「もー我慢できない。これは犯罪だ。あのチーズは高かったし、あれは、俺が田舎に帰った時、お母が俺のためにわざわざ買ってくれたものだったんだ」。それを聞くと、さすがに気の毒になった。が、

「待てよ、俺の食料は？」。すぐさま冷蔵庫へ飛んで行って見ると、やっぱり、ソーセージが消えていた。しかしワインとビールは無事だった。

「ビール2本、チーズ500g、ソーセージ一本、一人分の夕飯には、ちょうどいいね」。二人は廊下に立ったまま、腕組みしてなんとか対策を講じなければ、と話し合っていた。そこへステファンの隣りに住んでいる、ルーディー、5階の東側に住んでいる、シルヴァがやって来た。そこで、立

ち話しもなんだからと言うことで、我らが台所で、生き残ったビールを飲みながら、案を練ることにした。これが事実上、少なくとも俺がそこに住んでいた間、5階西側の台所で、そこの住人によって開かれた最初の酒宴となった。それ以来、俺達は、「ハロー」だけの付き合いではなく、台所で一緒に飯を食ら

り、ビールの空きビンの山を共同で築いたりする仲になった。

あの時、どんな効果的な対策案が出されたかと言うと、特に何も出されなかった。結局犯人も分からずじまいだった。俺がちまーペンダンを去ってからも、次々と新しい貼紙がされているのかも知れない。

## スウェーデンに留学して

教育学研究科学生 上田 毅 毅



1989年夏から約1年間、私は北欧の一国スウェーデンのストックホルム大学へ留学してきました。今、そのことを振り返ると、この留学は私にとって初めての海外であったにもかかわらず、スウェーデンについて知っていることと言えば世界最高の福祉国家・白夜・バイキング・テニスの強い国・ボルボやサブくらいでとても予備知識とは言えない程度でした。ひょっとしたらまったくの暴挙であったかもしれませんが、その国について頭でっかちになっていなかったのだから見るもの聞くものがとても新鮮でした。

私がなぜスウェーデンか？留学先を決めるのはとても重要なことです。情報の豊かでない国に行くことへの不安もあり、いろいろと悩みました。結局、私の主な研究テーマの主観的運動強度の創始者であり、権威者である

ボルグ教授がスウェーデンにいたことが大きな理由となり、正解だったと思います。これからは海外へ勉強をしに行く人が増加する一方だと思います。行くならトップのところへ行くべきだと思います。

勉強はストックホルム大学の心理学部の知覚・物理学科とカロリンスカ研究所の所属であるG.I.H.（体操・スポーツ大学）の2か所でさせていただきました。心理学部では運動中の主観的な運動強度からその人の最大作業能力を推測することと漸増運動中の血中乳酸濃度の動態について、そしてG.I.H.では低圧状態での主観的運動強度について勉強してきました。

ストックホルム大学とG.I.H.では少し研究の仕方が日本と違いました。ともに研究者自体が実験をする事はまれです。ストックホルム大学では研究者に雇われた人が、G.I.H.ではカロリンスカ研究所に雇われたテクニシャンと呼ばれる人々がいて実験をしてくれます。

研究者は実験の計画を立てるだけで実験のデータを得ることができ、そのデータを元に論文を書くことが仕事です。日本では実験の計画から始まって実験、データ整理そして論文を書くまですべて己でしてこそ1人前という考え方がるように思います。両国の研究に対する考え方の違いを見たようでした。